



第57回群馬平和美術展を終えて

群馬平和美術展実行委員会事務局長 酒井重良

今年の群馬平和美術展は、8月10日～14日まで、高崎シティギャラリーを会場に開催されました。

一般の出品者数は81名で、作品数は139点でした。作品の種類は、あらゆるジャンルにわたり、プロ・アマの垣根を越えて、集結されました。今年は全体として、作品のレベルが高く見ごたえがあったと思っています。それは表現の技術の巧拙という枠を超えて、出品者それぞれの思いが画面に凝縮されているという意味です。

入り口を入ると、Fさんのインスタレーション。青いシートの上に白い輪の連なりが広がり、海の泡の形象とも、戦禍に散った人々の魂、無言の声の隠喩とも受け取れるものでした。その後ろには、Yさんのテラコッタの作品、周りの壁面には、大型の抽象作品やシュールレアリスムの絵が並びます。



第一展示室入り口正面

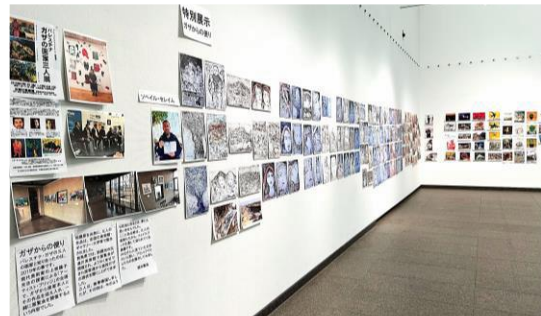
第一展示室は仕切りを設けて、4つのスペースを作りました。自分の身近な風景や愛する動物、人物など、油絵・アクリル・水彩などの画材を自由に選び自分の表現に生かしています。また、書・刻字・日本画・水墨画・版画・写真など、実にバラエティに富んでいると思われました。写真は、組み写真によって、そのテーマ性を深く掘り下げているように見られました。

予備室は、水彩・淡彩の作品が展示されました。落ち着いた空間となり、一つ一つの作品の良さが際立って見えていたと思います。

第二展示室は、彫刻と特別展示が中心でした。今年は彫刻作品の出展が多く、天井の高い空間や大きな開口部（ガラス窓）のある第二展示室ならではの空間の特徴が、彫刻と響き合っていました。彫刻は、真摯に対象に向かう作家の意識が、肉付けや彫りの跡に現れ、ヒューマンな造形を形作っていました。

特別展示は、「ガザからの便り」「石井壬子夫のヒロシマシリーズ 水彩・素描」「紙芝居『前橋くうしゅう 私の八月五日』」の三つでした。

特別展示「ガザからの便り」は、ガザに在住する、あるいは在住していた三人の画家からFacebookを通して送られてくる絵画をプリントアウトして台紙に張り、会場の壁面に展示したものです。



「ガザからの便り」の展示
(第二展示室)

イスラエルのガザ侵攻以前にも、時折絵や写真の投稿がありましたが、侵攻が激しくなると、より頻繁になってゆきました。

三人とも空爆により、住居やアトリエ、作品、画材など殆ど失い、家族と共に安全な地域を求めて避難する生活となりました。詳しいことはわかりませんが、多くの親戚を失い、



ソヘイル・セイラム



ライエッド・イサ



モハメド・アル・ハ
ウジリ

家族とも離れ離れになることもあったようです。フェイスブックに投稿される絵や写真が唯一彼らの安否の確認になっています。アートとして昇華されているとしても、それらの作品は、なお生々しい現場の感覚を伝えてきます。夏に向かう中で、作品数は100枚を超える数となりました。

この展示に、どのような意味があるのか、どのような効果があるのかを考えさせられるところでしたが、まず市民の方々に知ってもらうことが大切だと考えました。かけ離れた日常を理解することは可能なのか、悩まれるところでした。

会期中も、一日一日と数を増やしていく作品は、ギャラリーの壁をさらに埋めていきました。

一つ、特筆すべきことは、国際NGOに所属している方が、見に来てくださったことでした。この方は7月までエルサレムに派遣されていて、現在は東京の本部にいらっしゃるとのことでした。ガザにも何度か出向くこともあったとのことでした。知り合いもいて、場所によっては半壊した自宅で過ごされている場合もあるとのことでした。女性のアーティストにクリスマスカードのデザインをもらったことなども伺いました。今後の私たちの活動（群馬平和美術展）に繋げていけたら、と想像したりもしました。

「石井壬子夫ヒロシマシリーズ」は、今年で3回目になりました。今年は、素描と水彩を展示しました。

戦時中、東京藝術大学を卒業した石井壬子夫は、茨城県の水戸中学に赴任します。そこでの教員生活の中で、教え子を戦場に送り出したという自責の念が「ヒロシマ」をテーマとした作品を作り出したとされています。丹念に取材し、エスキースやデッサンを重ねた後、100号の大作に臨んでいました。

何故ヒロシマをテーマとしたのか、様々な見解があるところですが、戦争の惨禍の象徴

ともいえる原爆と自らに対峙させることにより、自分自身の弱さや迷いを問い直し、造形化しようとしていたとの説もあります。いずれにしても、人体や景物を形作るための線の質というか、その深さには圧倒されます。

「紙芝居『前橋空しゅう 私の八月五日』」は、元あたご歴史資料館館長の原田恒弘さんの実体験を基にした著作を基本に、文章を鈴木みどりさんが書き、絵を宮田榮子さんが描きました。発行は、「前橋に平和資料館設立をめざす会」です。前橋市では、昌賢学園まえばしホール（前橋市民文化会館）の一室に資料館を設立することになりましたが、専門学芸員の配置など、ソフト面での充実が期待されます。

また、この紙芝居の原画の展示に関連して、会期中の11日（日）と12日（月・祝日振替日）の二日間、作者の鈴木みどりさんによる紙芝居の実演を行いました。観客は大体15人～20人くらいでしたが、演者の淡々とした語り口に、強い平和への願いを感じ取っていたように思われました。今後ともこのような連携した取り組みを行っていきたいと思いました。

その他、運営の全体として考えてみると、さらに参加者を増やしていくことや、他団体との連携、広報の工夫など、様々な課題が浮かび上がってきます。

また今年は、異常な気象のために、来場者の数が通常の半分ほどになっていました。この活動を将来にわたって続けていくための課題を掘り下げ、取り組んでいきたいと思いました。



避難テントで絵を描く子供達